

紀 要

第 14 号

2001. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

下鈎遺跡における「導水施設」状遺構について

辻川 哲朗

1. はじめに

下鈎遺跡は栗太郡栗東町下鈎一帯に所在する遺跡である。周知の遺跡範囲内において河川改修事業が計画され、その事前調査として平成9年度より、滋賀県教育委員会が調査主体となり、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となって、継続的に発掘調査が実施されている。

発掘調査の結果、後述のようにさまざまな調査成果が得られた。現在発掘調査と並行して、整理調査を実施中であり、正式な発掘調査報告書は数年先に刊行を予定している。ここでは、整理調査の中間報告として、調査成果の中から、とりわけ注目される「導水施設」状遺構について、現時点での知見を提示することにしたい。なお、整理調査中であるため、本稿の報告内容については、その後の整理作業の進展により変更する場合があることをご了承いただきたい。

2. 遺跡の概要

立地(図1) 下鈎遺跡は野洲川とが形成した扇状地の末端付近に位置する。周辺の標高は、95～96mをはかる。周辺の調査では溝・流路等が確認されており、おそらく扇状地末端付近において、網状に流下する水流により、おおもね東西方向を志向する微高地が形成され、それらの上に集落が占地されたと考えられる⁽¹⁾。

従来の調査(図2) 下鈎遺跡については、栗東町教育委員会および財団法人栗東町文化体育振興事業団によって、地道な発掘調査が積み重ねられてきたことを無視することはできない⁽²⁾。その結果、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかになったからである。とりわけ、数カ所において確認された弥生時代中期後半頃の溝から、環濠集落の存在が推定された。さらに、弥生時代後期後半頃の独立棟持柱を有する大型掘立柱建物群が確認されるとともに、周囲からは銅鏃・釧形銅製品等の銅製

品が多数出土しており、金属生産を行っていた可能性のある該期の中核集落として評価する説もある⁽³⁾。弥生時代の野洲川下流域における集落群の動向を考えるうえで欠かすことのできない遺跡であるといえよう。

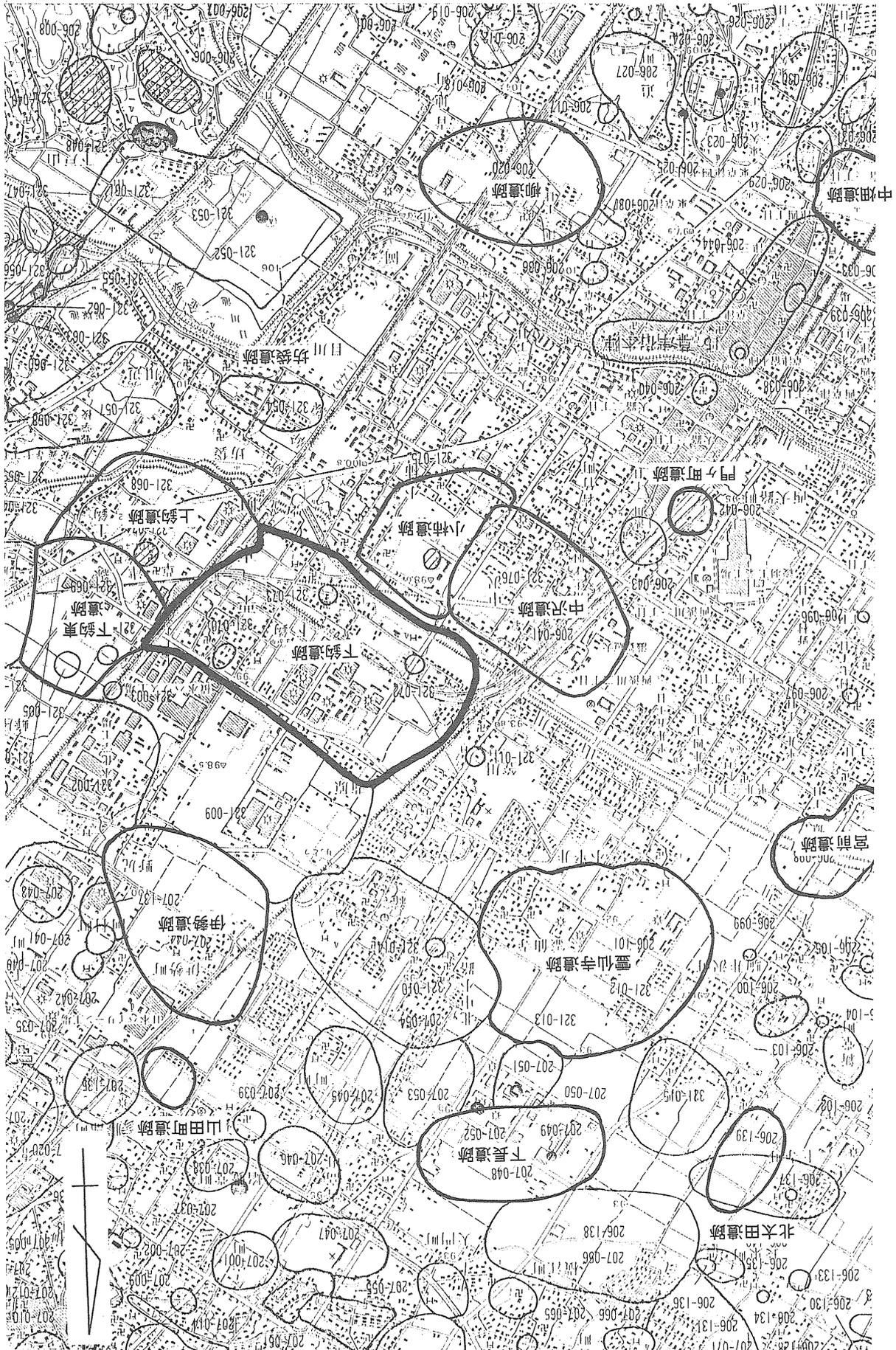
3. 調査の概要

今回の発掘調査の概要について簡単に触れておきたい。新設河川は推定環濠集落域を北東から南西方向に向けて横切って計画された。道路・河川等を目安として、大まかにA～Dの4地区を設定したがさらに各地区内には、水路・畦畔等を目安にトレンチを設定した(図2)。以下、検出遺構・遺物について概説する。

A地区(図3) 推定環濠集落域の中央から南西辺付近に相当する。1～6トレンチを設定した。地区内には円弧を描いて溝3条がほぼ並行しつつ伸びている(区画溝1～3)。さらに、区画溝1～3の北方、5・6トレンチには溝5が流れる。これらの溝内からは弥生中期末頃と思われる土器群等が出土した。区画溝1～3と溝4(古墳時代後期～古代頃の溝)との間には、土坑やピット群が分布している。その中には柱痕を残すものがあるが、建物構造を復元しえたのは、掘立柱建物1・2の2棟のみであった。土坑は楕円形あるいは不整形のものが多く、埋土中に土器とともに炭化物を包含するものがあるが、その性格については判然としない。さらに、今回取り上げる「導水施設」状遺構もこの区画溝1～3と溝4との間の空間にある。

B地区 A地区とちょうど対照方向にある。推定環濠集落の北東端付近にトレンチを設定した。推定環濠に相当する。地区内で、2条の溝を確認した。いずれも溝内から弥生中期末頃の土器類が主に出土している。また、これらの2条の溝より北東側では、ほとんど遺構の分布が見られない。さらに、上述した2条の溝の内側には、幅20m以上をはかる自然流

図1 下釣遺跡周辺の主要弥生時代遺跡 (S = 1/25,000) (平成7年度版『滋賀県遺跡地図』に拠る)



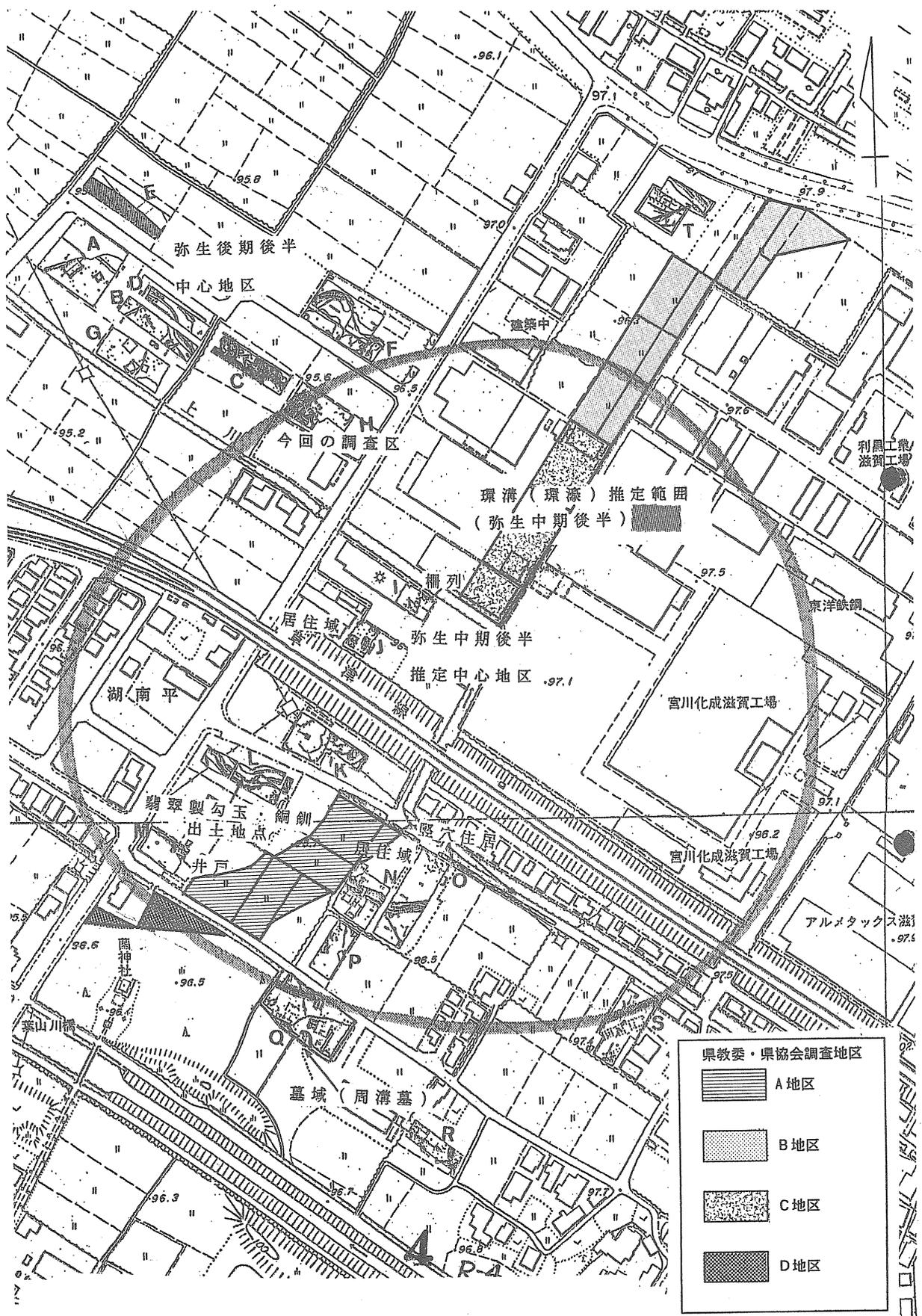


図2 下鈎遺跡における調査例 (S = 1 / 13,000)
 (近藤広氏原図に一部加筆)

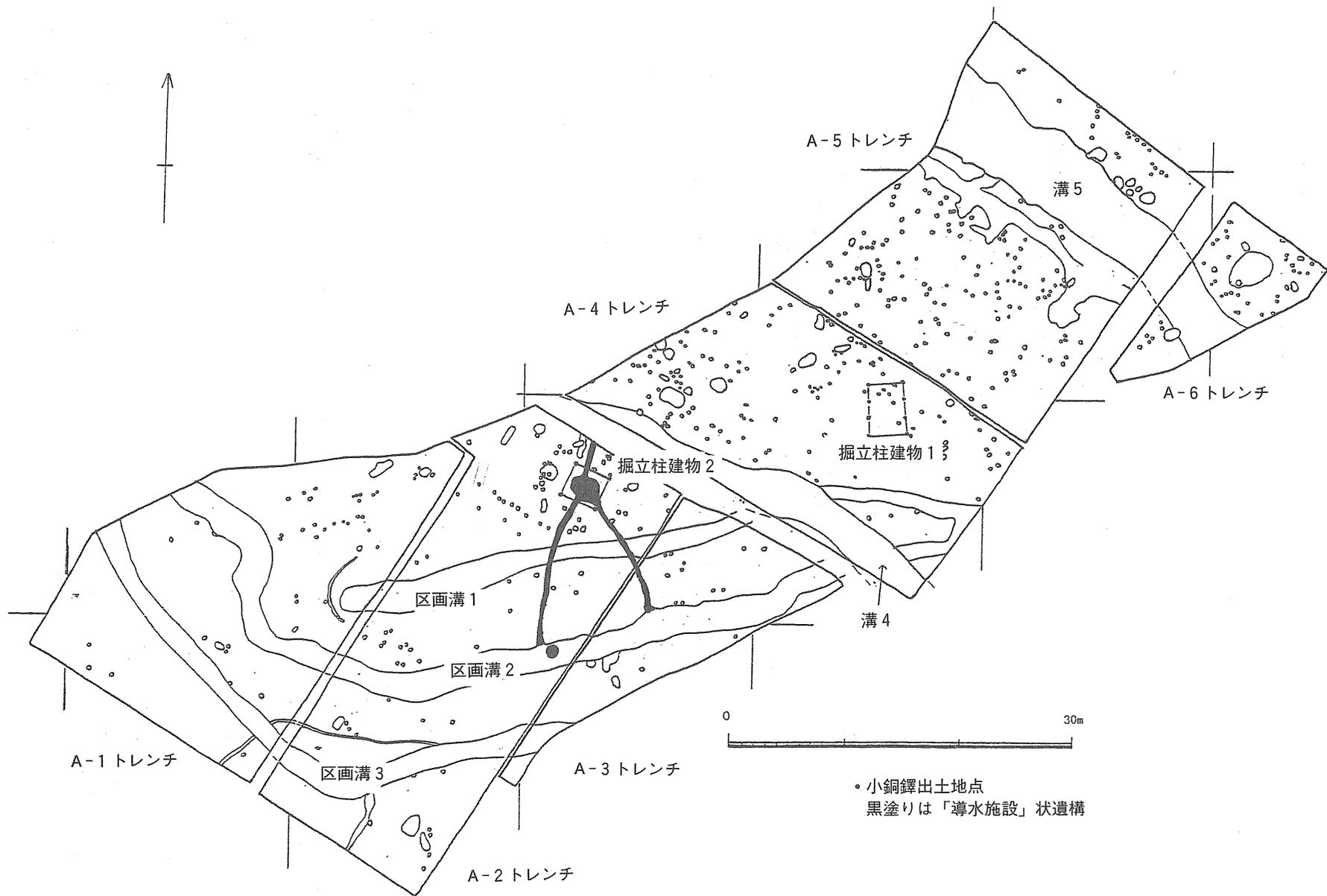


図3 A地区主要遺構配置図

路が検出されている。

C地区 推定環濠集落域のほぼ中心付近に相当する地区である。居住域の存在を想定して調査を実施したが、結果として後世の削平が著しく、若干例のぞいて、環濠集落にかかわる顕著な遺構は確認できなかった。

D地区 A地区のさらに西南側、推定環濠集落域の西南端に相当し、調査区内を推定環濠ラインが横切る。調査の結果、トレンチの南西隅で環濠と思われる溝1条を確認したが、出土遺物等は乏しい。それ以外に、該期の遺構・遺物は確認できなかった。

4. 「導水施設」状遺構 (図3～5)

つぎに、今回とくに取り上げたい「導水施設」状遺構の詳細を述べ、あわせて、「導水施設」状と解釈した理由について提示する。

遺構の構造 今回扱う「導水施設」状遺構は、以下の5つの個別遺構から構成される複合遺構である。

土坑 径2.3m・深さ0.8m程度をはかる。平面は不整形で、後述するように溝Ⅰ～Ⅲがとりつく。土坑は素掘りで、護岸施設の痕跡は確認できない。埋土は11層程度に細分することができた(図5)。1～4層は、暗褐色系の粘質シルト層であり、ベースブロックを含む。若干の弥生土器片を包含していた。また、5・8～11層は、有機質に富む暗黒色粘質シルトと灰色砂質シルトとの互層となっている。暗黒色粘質シルトが滞水状況による堆積であるとするれば、流水状況と滞水状況とが交互に替わっていたと考えられる。また、北側壁面に堆積する6・7層は灰色砂質シルト～細砂層であり、流水に伴う堆積と考えられる。

溝Ⅰ 土坑の北側にとりつく溝である。幅0.3m程度深さ0.05m程度をはかる。現状ではきわめて浅い溝である。

溝Ⅱ 土坑の南側にとりつく溝である。この溝の南端は溝3に合している。溝Ⅰと比べて、幅はほぼ同規模ながら、深さは0.3m程度と深い。断面はほぼ長方形で壁が直立する傾向がみられた。

溝Ⅲ 土坑の南東側にとりつく溝である。この溝の南端も溝Ⅱと同様に溝3に合流している。形状や幅・深さについては、ほぼ溝Ⅱと同形・同大といえ

る。

掘立柱建物2 土坑と重複するように設けられた1間×1間の掘立柱建物である。柱間は約3mをはかる。この建物の柱穴は柱痕が遺存している。その設置については、柱を掘り方内に据えた後、その周囲を礫混じり粘土を充填している点が特徴である。同様の柱の設置方法は、管見では栗東町野尻遺跡1994年度調査掘立柱建物SB-3例(佐伯1995)や下鈎遺跡1997年度調査石敷きピット例等を確認している(大崎1999)。いずれも時期は後期後半であり、当該例より確実に後出することになるが、下鈎遺跡周辺の遺跡であり、相互間において系譜的關係を想定できる可能性があり、興味深い⁽⁴⁾。

出土遺物 若干の弥生土器片が土坑内および溝Ⅰ～Ⅲの埋土中より出土した。本稿では個別の遺物に関する記述は略する⁽⁵⁾。おおむね弥生時代中期末～兼康保明氏による近江地域の弥生土器編年ではⅣ-3ないし4段階に相当するものであると考えている(兼康1990)。ただし、これらの土器はいずれも小片であり、一括して投棄されたとは断定しがたい。厳密には、これら遺構群の埋没期間の上限を示すとするとどまるものであって、これをもって遺構の年代を決定することは難しい。

年代 それでは、「導水施設」状遺構の年代をいかにして想定すべきであろうか。現状で、その手がかりとなるのは、溝Ⅱ・Ⅲと合流する区画溝2の出土遺物である。区画溝2では、最上層を除いて、埋土各層から弥生時代中期末頃の土器群が出土している。土器群は層境や層中から炭化物とともに、まとまりをなして出土する地点が複数あり、まとめて投棄されているようである。それらの中には溝Ⅱからは区画溝2への流入土が入り込んでおり、その層位的關係から弥生時代中期末の時間幅のなかで、この「導水施設」状遺構の機能期間を捉えることができると考えている。

遺構の解釈 ここまでの記述では、この土坑・溝Ⅰ～Ⅲ・掘立柱建物2からなる複合遺構を「導水施設」状遺構と称してきた。これは「導水施設」と断定することはできないが、その性格として、「導水施設」を想定することが今のところ最も妥当性があると考えられるからである。以下、その結論にいたる解



図4 「導水施設」状遺構

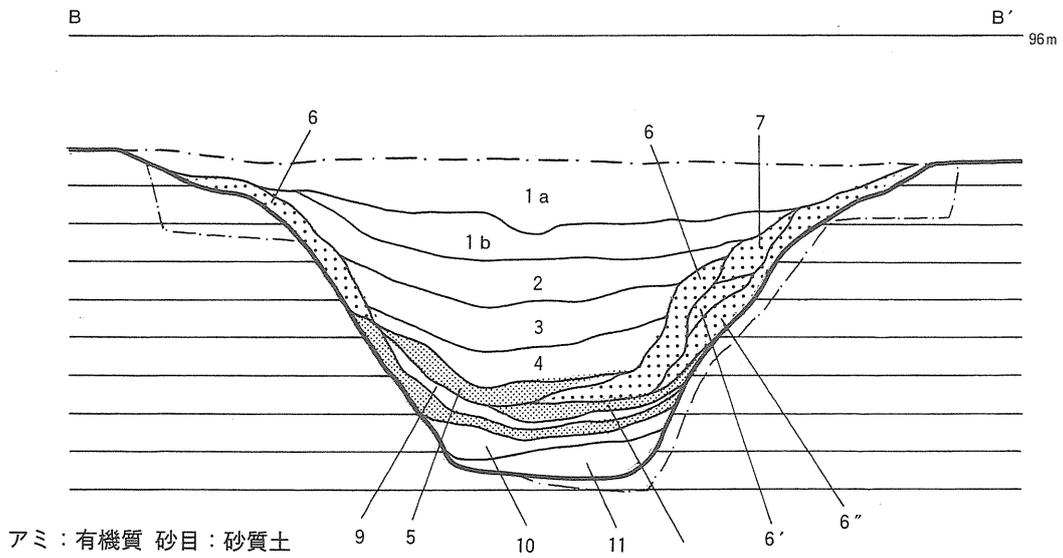
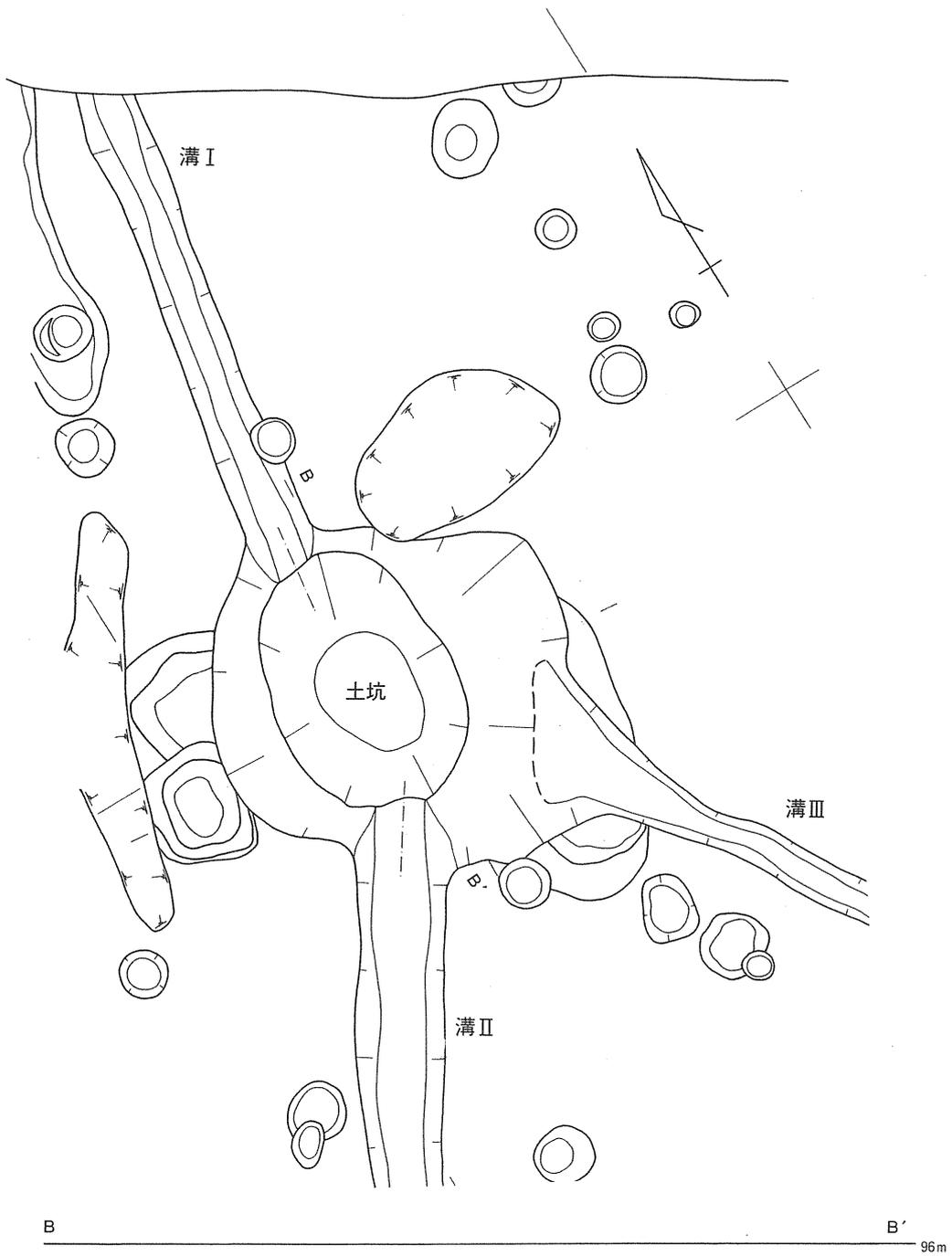


図5 「導水施設」状遺構詳細図・土層断面図 (S = 1 / 40)

積の過程を述べることにしたい。

まず、土坑内の堆積状況の観察から、5層以下の下部堆積層については、以下の堆積要因によって形成されたものとする。先述したとおり、有機質に富む暗黒色粘質シルトと灰色砂質シルトとの互層となっている5・8～11層は流水状況と滞水状況とが交互に替わるような堆積状況によって形成したものである。また、溝Ⅰがとりつく北側壁面において主に確認された灰色砂質シルト～細砂層(6・7層)は、流水に伴う一具体的には溝Ⅰからの流水に伴う堆積層と考える。

以上の観察からは、①溝Ⅰ→土坑という方向の水流があったこと、②土坑への流水は恒常的なものでなく、流水状況と滞水状況とを繰り返していたこと、の2点を導き出すことができた。

土坑へ流入し、そこで滞水した水は、その後、溝Ⅱ・Ⅲへ流出し、それらの溝を通して区画溝2へ排出されたと考える。それは、溝Ⅱ・Ⅲの底面レベルが溝Ⅰに比して低いことによる。また、土坑の底面レベルより溝Ⅱ・Ⅲの底面レベルは約0.6m程度高いので、土坑に滞水した余水が溝Ⅱ・Ⅲから排出される、という状況が想定できるのである。

以上の検討から、この土坑・溝Ⅰ～Ⅲからなる遺構群において、溝Ⅰ→土坑→溝Ⅱ・Ⅲという水の流れを想定した。さらに、土坑と重複して掘立柱建物2が設置されていることから、土坑には覆屋的施設があったことはほぼ間違いないといえる。

このような複合遺構に最も類似するものとして、古墳時代を中心として近年検出例の増加しつつある「導水施設」を上げることができよう。

「導水施設」の典型例として御所市南郷大東遺跡例(坂1996)を見ることにしたい。本例は山麓を流下する河川の上流部にダム状施設をつくり、堰き止めた水を木樋で、沈殿槽付きの第2の木樋まで引水し、その余水をさらに木樋で下流側へ排水している。木槽部分には覆屋が設けられ、周囲は垣根がめぐらされていた。年代は出土土器より5世紀中葉とされている。

坂氏は、この「導水施設」について「ダム・木樋など大規模な構造物を用いて、川の水の不純物を沈殿させ、さらに濾過を行って、きれいな水の生成を

行う施設」であり、「そのきれいな水が最終的に生成された場所である第2の木樋とそれに架せられた覆屋においてこの水を用いて何らかの祭祀が執行されたと推定できる」としている。

このような「導水施設」の機能とそれを構成する個別遺構は以下のとおりである。

- ①機能：水源、遺構：井戸(湧水点)・河川等。
- ②機能：導水、遺構：木樋。
- ③機能：沈殿・濾過、遺構：木槽+建物(覆屋)。
- ④機能：導水、遺構：木樋。
- ⑤機能：排水、遺構：溝・河川。

下鈎遺跡例の場合、各要素の対応関係は以下のようによまとめることができる。

①の水源は、調査区外にあたるため、不明である。

②の導水については、溝Ⅰがこれに相当する。

③の沈殿・濾過については土坑が相当し、その覆屋として掘立柱建物2が相当することになる。

④の導水は、溝Ⅱ・Ⅲが相当する。

⑤の排水先は区画溝2が相当する。

以上のように、下鈎遺跡例に関しては、①の水源が確定できないことをのぞけば、ほぼ「導水施設」の構成要素を満たしていることになる。

小銅鐸との関係 最後に、区画溝2から出土した小銅鐸との関係について、簡単に触れておきたい。小銅鐸は、溝Ⅱと区画溝Ⅱとの合流部付近より1点出土した(図4)。小銅鐸自体の詳細はここでは省略する。出土地点が「導水施設」状遺構に隣接する場所であることは、周辺での諸状況も考慮すると、看過できない。というのは、「導水施設」状遺構の北方には、溝5の延長部分が町教委によって調査されており、そのさい、銅釧・翡翠製勾玉の出土をみている。つまり、溝5に北方を、区画溝1～3によって南方を囲まれた空間内に「導水施設」状遺構があり、その周辺部からは、小銅鐸・銅釧・翡翠製勾玉といった特殊遺物の出土が集中しているからである。

さらに、ここで留意すべきは、「導水施設」が「流水祭祀」ともいべき祭祀装置であったとする坂氏の指摘である。

また、小銅鐸の出土地点に関しては、集落内の溝・

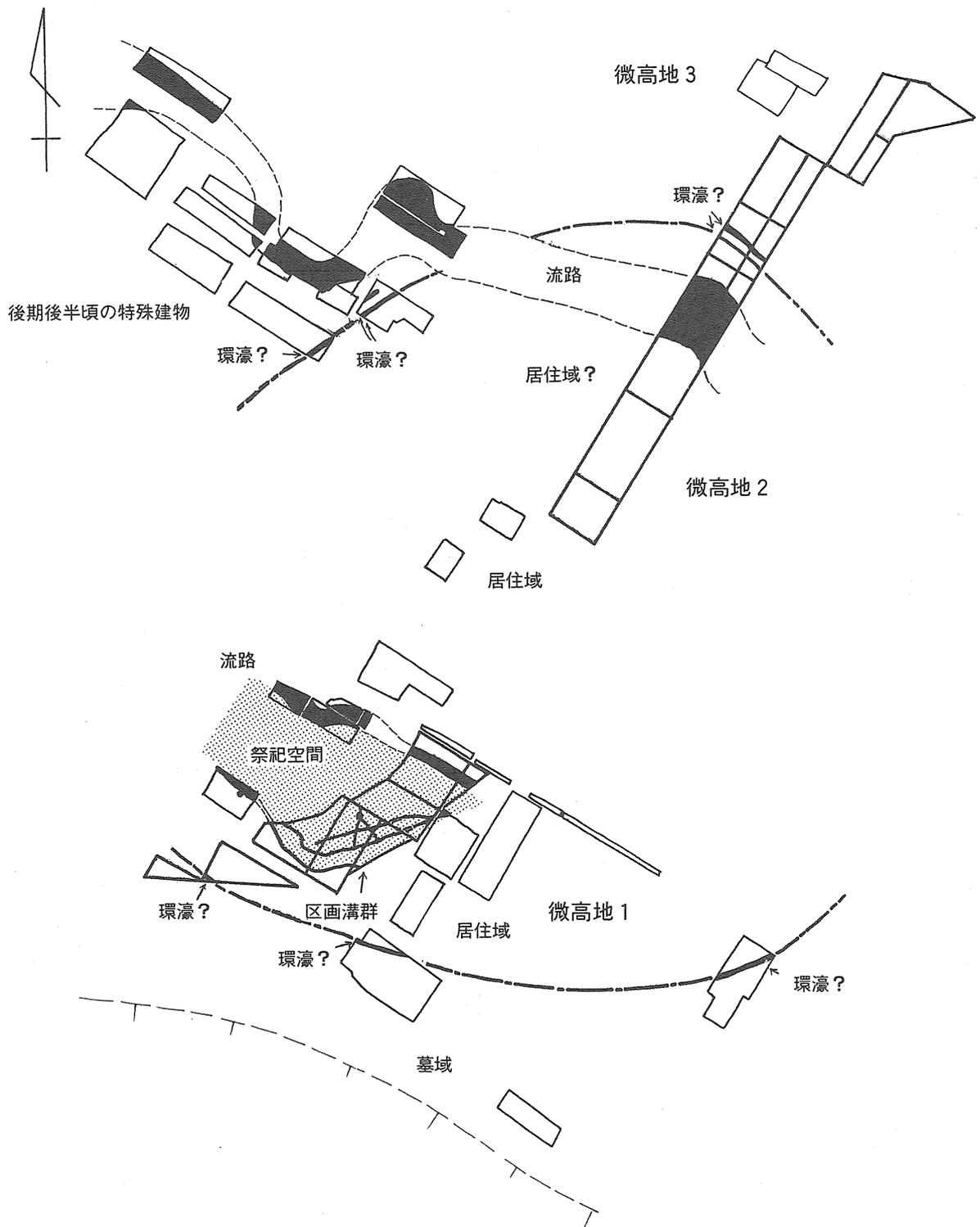


図6 検出遺構と集落内の機能区分案 (S = 1 / 3,000)
(弥生時代中期末頃)

住居等から出土する傾向が知られている。その中でも、弥生後期頃の井戸付近より出土した岡山県下市瀬遺跡出土例は注目される。本例では、その出土状況から井戸枠の杭に小銅鐸がつるされていたことが指摘されており(新東1973)、おそらく小銅鐸が井戸に関わる祭祀に使用されていたと考えられるのである。

以上から、下鈎遺跡例の「導水施設」状遺構を「流水祭祀」装置とすれば、溝5・区画溝1～3によって区画された空間は、集落内における祭祀的なエリアとして位置付けることができると考える。さらに、下市瀬遺跡例のように水に関わる祭祀に小銅鐸が使用された事例を参考にすれば、下鈎遺跡出土小銅鐸が上述した「導水施設」状遺構において執り行われた祭祀の道具立ての一つとして使用された可能性は強いと考えている。

5. まとめ

以上、下鈎遺跡において検出された複合遺構について、「導水施設」である可能性を指摘してきた。ただし、下鈎遺跡例を「導水施設」と断定するには、幾つかの問題点が残っている。第一に、水源の問題である。下鈎遺跡例の場合、溝Iの北側は一部溝4の掘削によって破壊されている。その北方A-4トレンチの範囲内には溝Iの延長部分は確認できなかった。それゆえ、水源の所在はつぎの可能性が考えられる。まず溝4によって破壊された部分に井戸があり、そこから導水したとする案、また、溝4付近で北西方向に屈曲するとした場合、調査区外-A-1ないしは2トレンチの北方部分に水源—おそらくは井戸—があったとする案を想定することができる⁽⁶⁾。ただ、これらの想定については、想定される井戸と土坑との関わり、水源からの引水の具体的な状況について未だ具体性を欠いているくらいがあることは否めない。

またいわゆる「導水施設」の場合、木樋・木槽等の採用が一般的であるのに対して、下鈎遺跡例では、溝・土坑という不可搬的な掘り込み遺構が採用されている点において相違する。それゆえ、両者が機能的に一致するのか、あるいは同一の系譜に位置付けられるのか、という点において問題を残している。

さらに、いわゆる「導水施設」例との間には、時間的なヒアタスが存在することも問題点の一つであろう。現在のところ、管見では、「導水施設」の最古例は、古墳時代初頭頃の奈良県桜井市纏向遺跡例(石野他1976)、古墳時代前期頃の滋賀県守山市服部遺跡例(大橋他1980)⁽⁷⁾等であり、確実に弥生時代に遡上する例を知らない。下鈎遺跡例の年代比定が妥当であれば、最古級の「導水施設」となるわけであるが、この時間的ヒアタスについては、今後の出土事例を待って検討を期したい。

現時点での結論としては、下鈎遺跡例について、「導水施設」として解釈することが最も妥当性が高いと判断している。ただし、上記の問題点も残っており、今後の検討課題としたいが、担当者としても判断に迷うところが多いため、読者諸賢からのご意見・ご教示をいただければ幸いである。

(つじかわ てつろう：調査普及課主任技師)

註

- (1) 遺跡周辺の地形環境について現在旧地形の復元作業を試みている。詳細は別稿にて報告することにした。
- (2) 以下、個々の典拠については、紙幅の都合で省略させていただくが、『栗東の歴史』および、各年度の『栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』・『栗東町埋蔵文化財発掘調査年報』栗東町教育委員会・財団法人栗東町文化体育振興事業団に基づくものである。
- (3) 佐伯2000等による。
- (4) このような柱設置方法が時間的・空間的にどの程度の普遍性を持っているのか、今後追求する必要があると考えている。
- (5) 今回、出土遺物については、紙幅の都合で、図示することができず、年代比定の根拠が曖昧に終わってしまったことを深く謝す次第である。正報告段階では、遺漏なきように努めることを期したい。
- (6) 以上の想定は水源に湧水(井戸)を想定するものである。水源として河川等を想定するには、本例の立地からしていささか困難である。というのは、溝5が北方にあるものの、そこからの引水は、溝5の底面レベルがかなり低いからである。
- (7) ただし、服部遺跡例については、石野博信氏は山崎秀二氏から伝聞として、2世紀のものであると述べている(石野1994)。

文献

石野博信他(1976)『纏向』桜井市教育委員会

- 石野博信(1994)「邪馬台国の時代と近江」『大型建物から考える邪馬台国の時代と近江』皇子山を守る会
- 大崎隆志(1999)「⑩下鈎遺跡」『栗東町埋蔵文化財発掘調査1997年度年報』栗東町教育委員会・財団法人栗東町文化体育振興事業団
- 大橋信弥他(1980)『服部遺跡発掘調査概要報告書』滋賀県教育委員会・守山市教区委員会
- 兼康保明(1990)「近江地域」『弥生土器の様式と編年 近畿Ⅱ』木耳社
- 近藤 広(1999)「近江野洲川流域における中・後期の弥生集落」『第45回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の集落—中・後期を中心として—』埋蔵文化財研究会
- 近藤 広(2000)「近江湖南地方の弥生集落」(第102回皇子山を守る会例会資料)
- 佐伯英樹(1995)「⑥野尻遺跡」『栗東町埋蔵文化財発掘調査1994年度年報』栗東町教育委員会・財団法人栗東町文化体育振興事業団
- 佐伯英樹(2000)『平成12年度歴史入門講座資料 第3回弥生時代の栗東町—大型建物・銅鏃・銅釧—』守山市埋蔵文化財センター
- 新東晃一(1973)「岡山県下市瀬遺跡出土の小型銅鐸について」『考古学雑誌』59-2、日本考古学会
- 辻川哲朗(2000)『平成12年度歴史入門講座資料 第5回下鈎遺跡と小銅鐸』守山市埋蔵文化財センター
- 坂 靖(1996)「古墳時代の導水施設と祭祀—南郷大東遺跡の流水祭祀—」『月刊考古学ジャーナル』398 ニューサイエンス社

編集後記

今回は8編を数える多数の論文を掲載することができました。内容も、縄文時代から近世までと各時代の研究論文のほか、普及事業についての報告もあり、バラエティに富んだものとなりました。

埋蔵文化財を取り巻く環境は年々厳しくなっていますが、我々の調査・研究の成果をわかりやすくお届けできるよう、今後も様々な形で努力していきたいと思ひます。

(T. K)

平成13年(2001年)3月

紀要第14号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668